

## 三原市民と市長の「みらいトーク」(第26回)実施結果

目的 市長が地域や団体の活動の場に出向き、市民との対話を通じて市政やまちづくりに対する積極的な意見や提案を広く聴き、今後の市政運営に活かすとともに、市民の市政への参画機会の拡充を図ること。

日時 令和5年7月27日(木曜日)18時00分から19時30分

場所 三原市役所 8階 会議室 801・802

参加者 市内障害者雇用企業(7社)

医療社団法人興生総合病院

株式会社金光組

株式会社みどり商会

松尾電機株式会社

有限会社モリタ美研

社会福祉法人亀甲会

有限会社わくわく

内容 各項目について市長が質問し、参加者から対話形式で意見を聴取。

### 1 障害者を雇用する上での想いと現場の課題について

【参加者から】

- ・自社での業務ではなく、お客様のビルや施設などで作業を行うため、障害を持った職員を派遣する派遣先の理解が必要。「障害者を派遣してもらっているが、一人前に仕事できるのか」と聞かれたこともある
- ・民間よりも行政のほうが理解をしてもらいにくい。
- ・官公庁は仕様書のとおり業務ができるかという点を重視されるため、障害者だけの雇用では、仕様書どおりの業務を行ってもらえるか担保が取れないという考え方で不安視されることがある。
- ・特別支援学校でも就職の際にも似たような状況があると聞いたことがあり、雇用主、顧客の理解(色眼鏡で見られない状況)が必要。

### 2 障害者雇用をするようになったきっかけについて

【参加者から】

- ・重度の知的障害の子を雇用した。カーブが好きな子だったので、カーブ好きの社員が指導しながら、社員に代わって、倉庫を一つずつ、少しずつ綺麗に掃除していった。社員の作業もスムーズになり、社員の清掃負担も減ったことから、障害者雇用について少しずつ社員の理解も広がっていった。

障害者雇用をしたことで、健常者含め、人の良いところ、できることを見つける習慣

が拡がり、会社の雰囲気良くなった。

- ・職種上、知的障害の人を多く雇用している職場だが、最近は身体や精神、発達障害のある人の雇用も進めている。知的障害者以外の雇用経験がなく、課題もあるが、障害者就労支援団体に社員全員への障害特性に関するレクチャーを依頼したり、障害者本人の支援に定期的に入っていただいている。支援機関と連携しながら、専門的知見と現場の経験を合わせるのが大事。
- ・支援機関の担当者はすごく忙しそうなので、行政でも何かサポートできればいいのではないか。

### 3 支援機関のサポートについて

#### 【参加者から】

- ・福祉事業所は障害者本人の状況にあわせた支援を行うことを第一に考えるが、働く場合はある程度仕事（雇用側）に合わせないといけないところがあり、そこが難しい。雇用側の社員も含めて一緒に仕事を考えていくことができれば良い。支援する側は、障害者と企業、障害者とその家庭の間に入って支援するため、企業側の考えを理解することも必要だと感じる。支援する側と企業が相互理解を深められるようなネットワークがあれば良い。
- ・企業、当事者、家庭と支援する側とのコミュニケーション（連携）が大事。いずれが欠けても難しく、苦しいとき、相互に相談できると良い。
- ・支援機関への通所と会社での勤務を隔日で行っていた障害を持った社員が、他の障害のない社員と話ができるようになったことで、一週間会社で働きたいと言ってくれるようになった。
- ・障害を持った、子どもや孫くらいの年齢の社員が頑張っている姿を先輩社員たちが見て、自分達も頑張ろうという意欲が湧き、職場の空気が変わった。こういった良い経験をまだ障害者雇用をされていない企業へ伝えていく必要がある。
- ・障害者雇用をはじめたきっかけは、スタッフが障害について理解するため。障害者と一緒に働けば、できるかなと思った。初めは現場職員の理解不足もあった。小さい法人なので、サポートする専任職員はつけられない。その際に支援機関に助けていただいた。事業所だけではとても続かなかった。
- ・健常者と障害者では考え方、受け止め方に違いがあり、継続して就労してもらうための支援が本当に難しく、考え方などのすり合わせが必要。健常者側が障害者側を理解する必要があると思う。障害者が働いてくれて「楽になる」「助かる」という環境になるまでには時間がかかる。支援機関には、継続して働いてもらえる環境づくりなどの支援をしていただいております、非常に助かっている。
- ・中小企業家同友会の中でも障害者雇用まで至っていないが、興味のある企業はある。しかし、どのような方がいて、どのような仕事をお願いできるかわからないため、雇用に

踏み出せない企業が多い。

仕事をしたい障害者の年代、特性、希望の仕事（こんな仕事ができる）などの情報を企業側が把握できるような仕組みがあれば障害者雇用が進むのではないか。

- ・お互いを知らないということが不安につながるので、企業が障害を持った方のことを理解するための勉強の場があれば良いのではないか。企業、社員の理解が進めば、意識も変わってくる。また、雇用をはじめてしまえば意外と回っていく。やってみたらわかることが多く、やる前は否定的な社員が多い。一步踏み出すことが大事。

#### 4 障害者職業紹介冊子「TOMONI」などを利用した障害者理解促進等について

##### 【参加者から】

- ・障害者職業紹介冊子「TOMONI」は、特別支援学校の生徒が自分たちでインタビューして作成した、障害者雇用への理解を深めるための大事な資料となっている。生徒からは、「自分たちはなぜ働けないのか」と聞かれたりする。その質問に企業が回答し、生徒の観点で編集し制作されたもの。YouTube といった動画による媒体もあるので、そういったものを活用すれば、障害者の雇用についてイメージができ、障害者雇用が進むのではないか。
- ・障害者自身もどのような仕事があるのか、具体的にイメージができていない。仕事の動画など内容がわかりやすい資料を作ることで、障害者側にも仕事内容について理解してもらえると良いのではないか。

#### 5 その他

##### 【参加者から】

- ・障害者雇用をすすめている企業でも理解のある部署、無い部署の差は激しい。行政の助成金はありがたいと思っているが、障害者雇用をより進めるには、市が業者を表彰してもらえないか、表彰されることで、社員の理解促進につながる。
- ・特別支援学校の先生には、生徒がいろいろな職場を体験することで、働くイメージができ、それを他の生徒に説明ができるようになると思うので、仕事を体験してみてもどうかと伝えた。また、先生たちと情報を共有することも大事だと思った。
- ・求職している障害者で自分の企業に来たい人がどれだけいるのかがわからない。企業側もこんな仕事に来てほしいという情報を出す必要があると思う。
- ・公共交通機関が少ないと思う。フルタイムじゃない時間帯のバスがなかったり、もう少し移動手段があれば働ける人もいるのでは、と考えてしまう
- ・手帳があれば市内のバスが無料なのは良い取組。
- ・市からのアンケートや制度説明が文書で来るが、障害者の中には文書や難しい漢字を読めない方もいるので現場で一人ずつ説明を行い、回答している。現場に来ていただき、直接説明し、話を聞いてもらうなど配慮いただくとありがたい。

その際に、行政的な見地からアドバイスをいただけるとよい。

## 6 市長まとめ

- ・障害者雇用をしたことがない企業にとっては、雇用に踏み出す一歩目がハードルになっている。
- ・障害者がどのような仕事ができるか、具体的にイメージできれば雇用が進むかもしれない。
- ・障害者雇用のスタートには社員の理解不足・雇用環境が壁になっており、社内理解が進んでも、顧客が壁になる場合もある。障害者側がどんな仕事があるのか体験できることも大切であり、雇用や就労、定着には支援機関などと相互に連携していくことが大切だと感じた。
- ・社内での理解だけでなく、顧客等の理解も必要であり、一部だけでなく一体的に理解を深めていく必要があるが、一朝一夕で理解を得る、変えていくことは難しい。
- ・意見をいただいた動画での仕事内容紹介や雇用企業の見学、表彰など、少しずつ取組を進めていくことが重要だと思う。
- ・ここで伺った意見などを踏まえ、障害者雇用が進むだけでなく、障害を持った人を含む全ての人が生き生きと働ける三原市にしていきたい。